平成29年6月24日

滄溟会関東支部会員の皆様

支部長拝命のご挨拶

増殖学科24期　田中　敏夫

この度、滄溟会関東支部支部長を拝命いたしました、増殖学科24期 田中敏夫です。

昭和45年、大阪万博が開催された年に入学し、オイルショックでガソリンの価格が突然2倍になった年に卒業しました。当時は今のように手厚い就職支援も無く、吉見の田舎でカッターの合宿ばかりしていて世の中のことを何も知らなかった私は、名ばかりの面接で飲み会に誘われそのまま、神戸のケンコーマヨネーズ㈱という中小企業に入社しました。社長は今年初めに母校に胸像が設置された松生義勝先生のご子息の松生睦氏でした。今でいうならば、間違いなくブラック企業でしたが、「きつい仕事をこなしてよりよい生活をしよう」という松生社長の薫陶を受け、会社の成長とともに、33年間をケンコーマヨネーズで過ごしました。

現在は中小企業診断士として企業の経営支援をしていますが、人のお世話をする中で、改めて人間は一人の力で生きれるものではないという事を実感しています。今日、私がそれなりに生活できているのも、今まで係わりを頂いたあらゆる方々のおかげであると感謝していますが、とりわけ、母校、水産大学校では4年間しか過ごしていないにも拘わらず、私の人生にとって大きな恩恵を頂きました。

とはいえ、卒業後は滄溟会の総会に時々参加する以外、母校にも水産業界にもほとんど縁のない世界にいましたので、今回の関東支部長就任に当たってはもっと適任の方がいらっしゃると思いましたが、縁あってお引き受けした以上、私なりに出来ることを誠意を持って務めさせていただきたく思います。また、それがお世話になった母校への恩返しにもなると考えています。

さて、冒頭で述べた通り私が入学した昭和45年は、水産大学校にとっても節目の年ではなかったかと思います。その年に新寮が完成し、水大滄溟寮の伝統がその年から少しずつ変わり始めました。当時は大学紛争が吉見にも及び、学問の自由を叫ぶ連中が、団体交渉

と称して、集団で教官を罵倒するような、それまで想像もつかなかった場面にも出会いました。

そして水産業界も、漁業中心から、広く加工・流通・販売を含めた水産業として新たな方向へ歩み出した時期であったと思います。昭和47年に日本の漁業・養殖業は世界一となり、当時、水産業は外貨獲得の花形でもありました。しかし、その頃をピークに業界のベクトルは下向きに変わり始め、昭和52年の排他的経済水域いわゆる200海里水域の設定により、遠洋漁業からの撤退も始まりました。

それ以降、水産業界は様変わりし、大型漁船に乗り組んで世界の海を駆け回り、魚を取りまくって世界中に売った良き時代の漁業から、逆に世界から魚を買ってきて付加価値を付けて売るという広い意味の水産業になりました。漁業も大型の遠洋漁業から零細の沿岸漁業中心に変わってきました。

本日、事前に出席の連絡を頂いた方は71名でした。年代別の内訳を見ると、60歳代以上の方が32名、50歳代までの方が残り39名です。上記の分け方で言うと、60歳代以上の方が漁業全盛の時代に学生生活を送った方と言えます。

現在、水産学部の名前が残っているのは、北海道大学、長崎大学、鹿児島大学だけです。その中で、水産大学校が今日まで、水産の名前で生き残っているのは卒業生がそれぞれの持ち場で成果を出し、頑張ってきたことが一番の要因だと思います。学校の値打ちは、入試の偏差値でも、学校の施設でもなく卒業生の評価で上がるものです。

そして、あえて誤解を恐れずに言わしていただければ、今まで水大の価値を上げてきた人たちは漁業全盛時代の文化を持った人たちでした。ところが本日参加された方の内訳を見ると、それ以降の方が半数以上を占めています。まさに、今、滄溟会の会員も漁業文化の洗礼を受けた人から、広い意味の水産業へと変化した時代の文化を持った人へとその構成を変えつつあるところです。

現在の水大の名称をご存知でしょうか。

「国立研究開発法人水産研究・教育機構　水産大学校」、学科は水産流通経営学科、海洋生産管理学科、海洋機械工学科、食品化学科、生物生産学科です。

現在の学科に改称されたのが平成9年です。ザックリいうと今の30代以下の方が新しい学科で学び卒業された方です。因みに本日、事前に登録された方で該当するのは5名です。

名称だけでなく、学校は時代の要請に合わせて変わっていますので、滄溟会に参加される方も漁業時代、水産業時代から更に新しい時代の人が増えていく事でしょう。

今年、滄溟会は67期の卒業生を迎え、上記の3つの異なった文化の背景をもつ同窓生が一堂に会する場となっています。ただし、全員が吉見で過ごしたという、普遍の共通体験がありますから、背景は違っても意思疎通は即座に図れるはずです。

本会の目的は先ずは親睦の場であり、交流の場でありますが、吉見の体験という共通原語を持つ人に、ビジネスのきっかけ作り、高齢者の居場所、卒業したばかりの人の拠り所等、楽しくてためになる活動のプラットホームを提供することが滄溟会関東支部の使命だと考えます。

ここ数年、滄溟会関東支部を活性化せよとのご指摘を再三いただきました。しかし、滄溟会という会社が有って、そこへ顔を出すと何か良いことが有りそうだから、さあ何か良いことをしてくれ、というスタンスではだめです。自分たちで楽しみたい、何か繋がりたい、そういう思いで自らが積極的に動くことが必要です。学校は国立研究開発法人水産研究・教育機構となり、今後は旧水産研究センターの研究部門との交流も増えると思います。水大の人脈はますます多様化して行きます。母校とのつながりを強め、後輩を引上げて学校の評価を高めていく事も滄溟会が担うべきミッションだと考えます。

総会で懐かしい人との再会を楽しむことは大いに結構ですが、この素晴らしい組織を、年1回の飲み会で終わらせていては勿体ない、折角のこの絆をもっと活かしたいものです。

今年度、新たな滄溟会関東支部のスタートとして、先ずは情報の公開、発信を強化します。また、年1回の総会以外に会員交流の機会を複数回設けて、ネットワークづくりを推進し、自主的な活動への展開へとつなげたいと思います。役員一同、時間の制約もある中、手弁当でやっていますので、あまり格好良く抱負をぶち上げたりは出来ませんが、先ずは実行可能なところから一歩ずつ前進して行きたいと思います。

どうか温かい目で見守っていただき、これはという所では積極的に活動にご参加いただきますようお願い申し上げます。

以上